

## 第46回IUPAC総会&第43回世界化学会議に出席して

IUPAC（国際純正・応用化学連合）は、General Assembly（以下、総会）とWorld Chemistry Congress（世界化学会議、以下コンGRESS）を2年に1度開催している。今夏、第46回総会（7月27日～8月5日）と第43回コンGRESS（7月31日～8月5日）が、カリブ海に浮かぶプエルトリコ・サンファン市で開催された。

世界化学年（IYC）2011を記念した23名のWomen in Chemistryの表彰式や、プエルトリコの大学の化学系学生を中心に大空のもとで開催されたFestival de Quimica（化学実験ショー）、地球規模で直面している大きな課題への化学の貢献を議論するWorld Chemistry Leadership Meetingなどの特別イベントが盛大に行われ、通常のプログラムに色を添えた。またノーベル化学賞受賞者7名がコンGRESS期間中毎日1～2名ずつ講演するという充実した内容のイベントであった。

### 存在感を示した日本

総会には、専門分野からなる8つのディビジョン（物理化学、無機化学、有機化学、高分子化学、分析化学など）と、特定のトピックスを取り扱う常設委員会（用語・命名法・記号、COCI：化学と産業、CCE：化学と教育、CHEMRAWNなど）がある。ディビジョンミーティング（ディビジョンの下のサブコミッテ、プロジェクト、タスクのミーティングも含む）と常設委員会が並行して進められ、約300名が出席した。後半の8月3日と4日は、Council Meeting（理事会）が開催された<sup>1)</sup>。

### 〔Women in Chemistry 表彰式〕

IUPACは、世界化学年2011のプロジェクトの1つとして、世界の優れた女性化学者を顕彰する賞：“2011 Distinguished Women in Chemistry/Chemical Engineering”を定めた。日本から相馬芳枝・日本化学会フェロー（神戸大学特別顧問）が選出された。相馬先生のほか、化学研究者としても著名なタイのChulabhorn Mahidol王女、2009年ノーベル化学賞を受賞したAda E. Yonath イスラエルワイズマン科学研究所教授、Nicole J. Moreau IUPAC会長、Nancy B. Jackson 米国化学会会長など23名が選ばれ、表彰式が今回の総会期間中の8月2日に盛大に開催された。

式に先立ち、マリーキュリーの半生を描いた劇があり、ポーランドでは、当時ロシアが占拠しており、母国語を話すことすらも禁止されるような時代背景のもとでマリーが育ったこと、女性が高い教育を受けることはポーランドでは難しく、先にパリに出ていた姉夫婦の助けでパリの大学に進み、研究生生活に入り、結婚した時代までを演じ、厳粛な雰囲気を感じさせた。

表彰式は、約300名の出席者が見守る中で、受賞者が国別アルファベット順に呼ばれ登壇し、経歴・業績が詳細に読み上げられ、表彰盾を手渡された。淡い青色のドレス姿の相馬先生は、真ん中あたりに呼ばれ、堂々と受賞した。表彰は21時過ぎまで続いたが、多くの人が残り、受賞者の栄誉を讃えた<sup>3)</sup>。



理事会は、IUPACの最高機関であり、加盟する57カ国の代表が出席し、事前に案内されていた26の議題について、審議並びに報告がなされ、無事終了した。日本から、現副会長である巽和行・名大教授が壇上にあがるとともに、6票を有することから、澤本光男・京大教授、山内薫・東大教授、鎌田正裕・東京学芸大教授、相馬芳枝・神戸大特別顧問、長谷川美貴・青山学院大教授、川島が出席した。

Nicole J. Moreau 会長が、IUPACの活



写真1 左から Nicole J. Moreau IUPAC 会長、巽和行副会長、Jung-II Jin 前会長

動として、命名法などのColored Bookの発行状況、新しい元素Cn（コペルニシウム）の承認、IUPAC内外の機関（加盟国の化学会、産業界、政策策定者・政治家など）や若い世代との連携を深める活動などを紹介した。IYCについて、将来の化学の形の構築と持続可能性を目指し、化学と社会の対話の場と位置づけ、様々なイベントを振り返り、12月1日にベルギーで開催予定の閉会式を終わりでなく、新たなスタートであると宣言した。

巽和行副会長は、IYCの盛り上がり的大事にしながら、健康や環境など世界レベルでの課題に持続可能な内容とスピード感をもって取り組むこと、IUPACの存在感・社会性を向上させること、その中で、加盟国数をIUPAC100周年となる2019年に向けて、今回承認された3

カ国を加えた 60 から 100 を目指すことなど、会長に就任するにあたっての決意を示した。

トピックスとして、加盟国に、キプロス、ナイジェリア、タンザニアを承認し、57 から 60 とすること、新しい元素に関して、114 番目と 116 番目は、名前と記号について意見を求め、来年度承認する段階に進めることが採択された。113, 115, 117 番目の元素は次の課題となる。

プログラムの最後に、役員選挙が行われ、副会長選挙では、米国の Mark C. Cesa が選出された。彼は産業界の出身で、COCI を含め IUPAC の活動を 14 年にわたり熱心に続けてきた。2012 年・2013 年の異新会長に続いて、2014 年・2015 年は IUPAC として初の産業界出身の会長となる。

次回 2013 年の第 47 回 IUPAC 総会、第 44 回 IUPAC コンgress は、すでにトルコのイスタンブールで開催することが決まっており、再会を約束して閉会となった。

### 華やかなコンgress

コンgress は、化学会における年會に相当し、學術講演からなる。ノーベル化学賞受賞者による基調講演、10 テーマ

表 1 ノーベル化学賞受賞者講演

講演者	受賞年
Aaron Ciechanover (イスラエル)	2004
Richard R. Ernst (スイス)	1991
Ada E. Yonath (イスラエル)	2009
Roald Hoffmann (米国)	1981
Mario Molina (メキシコ)	1995
Richard R. Schrock (米国)	2005
Robert H. Grubbs (米国)	2005

のシンポジウムやワークショップ、展示会が開催され、6 日間で約 1,300 名が出席した<sup>2)</sup>。

8 月 1 日と 2 日の朝と夕方、3 日～5 日の朝にノーベル化学賞受賞者 7 名による基調講演が行われた。

### IUPAC の役割と化学会

オールドサンファン (旧市街) の公園で開催された化学実験ショーで、学生が地元の子供たちにスペイン語で保護メガネの着用を指導し、スライム作りや吸水性ポリマーによる吸水実験、汚染水の吸着ろ過による精製実験を手とり足とり、にぎやかに進んでいた。

60 カ国あまりの国の代表並びに化学者が集まった意味は、次の 4 点にあると思われる。

- ①最先端の化学の発表・討論すること
- ②化学を支える様々なインフラや制度を整備し (命名法、新元素など)、発信すること
- ③先進国と開発途上国が一体となって、化学の役割を認識し、向上を図ること
- ④上記を通じて、世界中の化学に従事する者が、多様な価値観を感じながら、交



写真 2 Festival de Quimica (化学実験ショー) の模様

流を深めること

日本は、異副会長 (2012 年から会長) の選出母体であること、各ディビジョンや常設委員会でアクティブなメンバーを送り出していること、IUPAC 賛助会員数で三分の一以上を占めていることなど、すべての点において貢献が大きいことが理解できた。

化学会は、10 月以降も表 2 のような IYC を冠としたイベントを計画中である。化学を伝える活動を地道に行っていきたい。

- 1) [http://iupac.org/web/nt/2011-03-17\\_46th\\_GA](http://iupac.org/web/nt/2011-03-17_46th_GA)
- 2) <http://www.iupac2011.org/>
- 3) <http://www.chemistry.or.jp/iyc2011/topics.html>

(川島信之 (日本化学会常務理事))

© 2011 The Chemical Society of Japan

表 2 日本化学会 IYC2011 関連イベント

日程	イベント	場所
9 月 28 日	世界化学年記念シンポジウム (野依良治理事長・理研、小林喜光社長・三菱ケミカルホールディングス、上田隆之局長・経産省)	東大・安田講堂
10 月 27 日, 28 日	化学工業日報社「世界化学年」記念シンポジウム (化学会共催)	學術総合センター
11 月 13 日～15 日	第 1 回 CSJ 化学フェスタ	早稲田大学
19 日～27 日	『きみたちの魔法—化学「新」発見展』	未来館
26 日, 27 日	夢化学 21 子ども化学実験ショー	未来館
12 月 17 日, 18 日	科学・技術フェスタ in 京都 (内閣府など主催)	国際会議場